



洋書輸入協会会報

Vol. 30 No. 8 (通巻351号) 1996年8月

理事会報告

7月19日(木)

(一)5月、6月分収支報告

6月21日および7月12日開催の総務委員会で審議の各収支について総務委員長より報告があり承認した。

(二)特別委員会

特別委員会設立については既報通りだが、中心になるメンバーの人選が略終り、近々文書にて当該社あて正式に依頼しその後会報にて公募を行うこととした。

(三)退会

下記3社より退会の希望があり6月30日付承認した。

ベーカー&テラー

白鷗洋書(株)(解散)

(株)郁文堂

海外ニュース

書籍価格の値上り

英国の書籍の価格は、昨秋実施された Net Book Agreement (書籍再販制度) 廃止の影響をうけて、一般物価の上昇率の倍以上高騰した。今週 Whitaker 社が調査したところでは、今年1月から6月の半年間に出版された書籍の平均価格は£24.71で、昨年の同時期に比べて6.7%アップした。また、半年毎に出される出版データも、過去12ヶ月に英国で出版された書籍の点数が過去最高の6ヶタにまでなったことを示している。1995年7月から1996年6月までの出版点数は100,440点で、前年より9.7%増えた。

Whitaker 社が算出した数字は、その年出版された全ての書籍の平均であるが、それは書店の店頭価格を反映しているとはいえない。書店では教科書や学術書に重きをおいているし(全体の57%を占める)、書店で実際に売られている値段を反映してもない。この平均価格は、図書館で書籍の価格上昇の指針として利用される。

大学や公共図書館の書籍購入予算の削減もあって、この価格高騰は新規購入図書のをまねくと思われる。しかし平均価格の上昇は、必ずしも N. B. A. 廃止に関連づけられるものではなく、一般的な書籍(小説、Non fic.、児童書)の価格はそれ程上がっていない。

新刊ハードカバーの小説の平均価格の上昇率は2.5%にとどまっており、ペーパーバックの平均は12pのみ上がった£6.08である。児童書の値上り率は0.2%に過ぎず、既刊書が平均4.5%下がり、新刊書は平均0.9%アップした。最も下げ幅の大きかったのはハードカバーの児童書で、1995年前半の平均価格£9.02に対して、今年前半の平均は£5.39であった。ノンフィクション全体の平均は5.8%アップしたが、既刊書の新版の価格は1.2%ダウン、新刊書は8.1%アップ、そしてハードカバーの新刊書は9.9%アップの£30.89であった。最も上げ幅の大きいのが専門学術書や科学技術書で、それぞれ9.2%および7%アップした。

教科書の平均価格は6.7%アップした。1980年代後半から1990年代前半にかけての GCSE および国のカリキュラム出版のブームのせいで、初等・中等教育の周辺が大変混乱し、その結果として多数の教育書出版社がその主要な出版業務をAレベルの教科書に絞ったため、価格の高騰をまねいたのだ。

—The Bookseller 1996年7月26日号より抜粋—

目次

理事会報告	1	文化厚生委員会だより	4	出版文化史逍遙(8)	7
海外ニュース	1	訃報	4	広告	8
洋書事始めのころ	2	洋書輸入協会史(107)	5		

洋書事始めのころ

中野孝次(作家)

戦後日本にドイツ書が初めて輸入されたのは1950年であった。それまでは戦争中からずっと洋書は鎖国状態だったから、最初の本を手にしたときはうれしかった。しかもわたしはそのときドイツ書輸入業者の社員としてこの戦後初の輸入を手掛けていたので、よろこびも一入であった。が、いまは当時のそんな事情を知っているひともしないだろう。わたしにしたところで、茫々45年の昔のことに属するが、これも歴史の一節には違いないから思い出を記しておくことにする。

丸ビルにあるそのGという会社にわたしが関わりだしたのは、大学3年のときアルバイトに行った縁からであった。マッカーサーの財閥解体令によって分割された三菱商事系の小会社の社長が、本業は事務所用の家具の製造販売だが、どうしてかドイツ書の輸入を思い立った。ドイツ人に知合いがあったかしてすすめられたのかもしれない。とにかく思い立つとすぐドイツ文学系の学生にアルバイトの申込みをし、わたしがそれに応じていったという次第であった。

一部屋しかない狭い事務所で、わたしに割当てられた仕事はすでに送られてきている夥しい数量のドイツ書パンフレットの選別であった。それらの中から日本で売れそうな本を選び出し、リストを作る。何しろまだ注文をとるわけにはいかないのを見ずてんで選ぶしかないのだが、わたしは独文科の学生で仲間がどんな本に飢えているか知っていたから選び出しには自信があった。

それから通産省に行って洋書の輸入手続きをとり、外貨の割当てを受け、ドイツの書籍販売業者にリストを送って注文し、向こうからの返事を待って必要な金額を送金する。そういうことを全部何も知らない文科の学生のわたしが一人なのである。これが丸善のような老舗なら戦争で輸入業務は途絶えていても輸入のノウハウはしっかりと伝えられていたろうが、こっちは家具屋さんだから誰も知らない。みんなわたしがやみくもにぶつかってやっていくしかないのだが、なにしろこちらはまだ24の若さでありこわい者知らずで、むしろ未知の世界に入るのをたのしんでいるふうであった。そしてそんないい加減なことでも本の方は本当にとどいたのである。

わたしは25歳で卒業すると、そのころ文科の卒業生にまともな就職口などあるわけもなく(焼け跡からの日本の復興が始まったばかりである)、そのままそのGと名付けたドイツ書輸入会社(社員はわたし一人きり)に勤めることになった。ドイツに注文し、やがて着くはずの本のリストをタイプで打って(タイプを打つのも仕事をしながら覚えていった)、各大学の独文科に送る注文取りの仕事も一人きりのその社員がしなければならない。そしてリストを送るとただちに恐ろしいほどの注文が殺到したのであった。

そのときくらい戦時中からつづいた洋書への飢えの切実さを目のあたり見る思いがしたことはなかった。まさにそれは飢えという言葉でしかあらわせぬような肉体的な要求で、どこもが何が何でも自分のところに本を欲しいというのである。とてもわたしがこれでも多すぎるかと懸念しながら注文した量では足りず、ただちに追加注文せねばならないが、それにも先立つのは外貨割当て許可を得ることであり、ただ注文送金すればいいという時代ではなかったのである。

最初の荷が着いたのはいつだったか。わたしが正式社員となってすぐの5月ごろではないかと思うが、中央郵便局から油紙に包まれた荷が山ほどどとき、それを開けたときは思わず歓声を発せずにはいられなかった。江戸時代の蘭学者が洋書を手にしたときはかくもあったかと思うくらい、まさにお宝のようにそれらは見えたのであった。戦時中からの長い飢えがあったからこのよろこびがあったわけで、物あふれのいまではかつてあんな爆発するようなよろこびがあったとは想像もつくまい。

そのお宝の初荷を誰に割てるかの権限は、たった一人の社員たる若造にあるわけである。そこでわたしは、各大学の有名教授たちにわけていい顔をしたかった社長は大いに不満であったが、わたしの仲間である貧乏書生たちにはまずそれらを割当てたのであった。彼らは金がないからすぐには代金を払えず、彼らの分はたちまち売り掛け金となってこげついたが、わたしとしてはそれでいいのであった。

当時1ドル360円をいくらにして代金算定していたの

であったか。洋書の輸入なんてもうかる商売ではない。ドイツから仮に15〜20パーセント引きでとりよせるにしても、そんな利益ではとても事務費にも足らぬくらいで、そこに例えば1ドル360円を400円と算定した差額40円を加えてやっと洋書輸入業が成立つくくらいだったと覚えている。事情はおそらく今も変らめはずで、現在は1ドル100円として、ドル価の変動に応じて洋書の値をきめよと要求するむきがあるようだが、そんな要求に応じては洋書輸入業というものは成立しないのである。事務所代、人件費、利子、輸入費、広告費その他は全部わずかの利益からひねり出さねばならないのだから。だからわたしは洋書輸入業がドルの変動にもかかわらずそれを古い値段のままにしておくのを非難しようなどとはつゆ思わない。むしろそんな要求をする学者たちを世間知らずとバカにしたいくらいのものである。そういう連中は手間ひまかけて並行輸入でもして、安く手に入ったとうれしがっているが いいのだ。

輸入が始った当初一番人気があったのは、戦前から日本でも人気があったトーマス・マン、リルケ、ヘッセ、カロッサの4人で、これはいくらとりよせてもすぐ売れた。が、それらが一巡すると、アメリカではいま（1950年）カフカ・ブームだそうだという噂がきこえてきて、ちょうどS・フィッシャー書店から刊行されだしたフランツ・カフカ全集が異常な人気を博したのであった。カフカはすでに1924年に亡くなっていたが、戦前の日本ではほとんど知られていなかったから、この戦後の初評価は新人の登場と同じ意味をもっていた。

またヘルマン・ブロッホ、ローベルト・ムージル、ベルトルト・ブレヒトなどという、マンたちと変わらぬ世代でいながら日本ではあまり知られていなかった作家が評価されだしたのもそのころであったし、雑誌を通じてハンス・エーリヒ・ノサック、マックス・フリッシュ、ハンス・ヘニ・ヤーン、ハインリヒ・ベルといった戦後作家の登場を知ったのもそれ以後であった。洋書輸入に携っているとそれらの名を一番早く知ることになるので、そのころのわたしのところは一種の情報センターとしてもにぎわっていた。

Gというそのドイツ書輸入会社に就職して1年あまり、わたしはそんなことでかなり鼻高々で勤めていたといっているだろう。新人のくせにしたい放題をし、そんな生意気な態度は社長たちには専横と見えたとはいえなかった。わたしにすればとにかく最初から全部自分ひとりでやっ

て軌道にのせたという自負があったけれども、所詮はそれも会社あったことである。わたしのわがままが手に余ったか、1年ちょっと勤めた翌年6月末にわたしはとつぜん解雇を言いわたされた。退職金もない解雇だったが、すでにカフカの『審判』を読んでいたわたしは言われるままに事態を受け入れた。いまになってみればそれでよかったので、わたしのような文学しか頭にないわがまま者にそもそも会社勤めができるわけがないのであった。

けれども今でもわたしはアルバイトの頃をふくめて2年ほど、あの戦後まもなくの時期を懐かしく思い出すのである。何の知識もなくやみくもに洋書輸入めがけて動き回り、本が本当に入ってきて全国の大学から熱烈に求められだした、あの洋書への熱狂時代が、あれこそが戦後というものであったという気がしているのである。日本人があれほどまでに外国書を求めた時代はほかになかったであろう。

わたしが大学に入ったのは昭和22年であったが、独文科の1年先輩にYという熱狂的なトーマス・マン愛好者がいた。あるとき古本屋に12巻だかのマン全集美本を見つけると欲しくてならず、所持する本を全部売り（わたしは2巻本の短編集を買った）、それでも足らぬと机も本棚もさらにふとんまで売り払ってやっとそれを手に入れたのだった。彼の下宿部屋にはその全集しかなく、寝るときは新聞紙にくるまって寝るとのことだった。

そのようなそんな滑稽な原書への偏愛も、要するに長いこと洋書の輸入が途絶えていたからであって、昭和25年にドイツ書が入りだしてからはむしろ洋書は貴重本でも何でもなかったのだった。

大体われわれは戦争末期のころはもう20歳から先の自分の生を想像できなかった世代である。まもなく自分たちは兵隊にとられて死ぬと覚悟していたから昭和20年夏には何も彼も売っぱらってしまっており、無一物のまま戦後を迎えたのだった。Yのような思いきった行為も無一物を体験したればこそ、こわいものなど何一つないというやけっぱちのような気持ちからのことだったのだ。

事情は敗戦ドイツでも同じだったらしく、ノサックという新しい作家は『没落』という小説に、ハンブルグ大空襲ですべてを失って無一物となり、その無一物の中から新しい人間の可能性を発見したと書いていた。そしてそういう小説によって逆にこちらも元気づけられ、輸入されだした新文学を通じてわれわれも生きる決意を新た

にしたのだった。

そういうことすべてをふくめて、洋書の輸入が始ったことは戦後日本の一つの出発点だった。まだ日本が若々

しかった時代の話である。

〔学燈（平成7年12月号）より転載〕

文化厚生委員会だより

第29回 囲碁同好会・箱根の集い

梅雨の晴れ間というのはこういう日をさすのであろうと思われる、陽光のキラキラと照りつける日、7月6日の暑さはかくべつであったが、それだけに新宿発のロマンスカーで飲んだビールの味は格別であった。

会場の「ますとみ旅館」は湯本の源泉をじかに引き込んだところで、しかも今年から風呂場も新装なったとかで、風呂好きは大よろこび。大広間に並べられた碁盤をはさんで、スイス方式4回戦のルールにより対局が開始される。

手すきのもの、早いとこ負けたものは、中央の碁盤で石毛先生（日本棋院八段、囲碁同好会発足時からの指導者）に指導碁を打っていただくことになる。「この頃、足が弱くなってしまって……」と言われる石毛先生は、今日の暑さに少々お疲れのように見うけられたが、その隙につけいって（？）金星をあげるものはなく、やはりプロは違う……と一同深々と頭をさげる始末であった。

夕食のご馳走をいただいた後は、ビールやお酒がはいったせいか、対局者のあいだから派手なボヤキや悲鳴があがるようになる。それでも、日付の変わらぬうちに、どうやら公式戦は終了し、後は夜のふけるのも忘れて好敵手をもとめ烏鷲を戦わすもの、碁盤よりはるかに大きい四角い板を4人で囲むものなどが深夜まで……。

朝食時に参加13人の成績が発表され賞品授与。

優勝：新井賢二（洋 販）

2位：柴山 康（洋 販）

3位：安達美元（〔元〕丸善）

来年はこの会も30年記念を迎えることになる。このところ少し尻つぼみな参加者の数が昔のように多勢になること、さらに新しい会員が参加されんことを期待するばかりである。

（メクレンブルグ・鈴木）



訃 報

株式会社三省堂書店 代表取締役社長 亀井辰朗氏は7月16日心不全のため逝去された。享年79歳。

既に近親者による密葬は済んでいるが、三省堂書店の社葬として9月3日護国寺 桂昌殿にて告別式がとり行われることになっている。

洋書輸入協会史 (107)

洋書輸入協会顧問 相 良 廣 明

126 昭和41 (1966) 年度 (s41. 4月～s42. 3月) の規約改正、理事改選、新入会員、退会者、業界消息など(前号よりの続き)

126. 6 代表者変更、社名変更、住所変更など
該当なし

126. 7 業界消息

(1) McGraw-Hill 社東京支局長 Lambert 氏退職、稲垣氏後任へ

昭和41 (1966) 年 5 月 13 日の理事会に、McGraw-Hill Book 社東京支局より、稲垣・荒木の両氏が出席、昨年10月の同支局の人事異動 (JBIA 会報 Vol. 29 No. 9 1995年 9 月号所載、協会史 (99)、115章参照) のその後の状況の報告があった。

それによれば、5 月 6 日付で McGraw-Hill 本社より電報が到着、同社東京支局長の Lambert 氏は即日退職となった由。理由は種々あろうが、独断専行が多かったこと、報告が欠如していたこと、取引先に好感を与えていないことなどが主なものと考えられる。

同氏退職の後、稲垣氏が東京支局長で支局の運営とリプリント版の責任者になり、販売面は荒木氏が担当する由。

以上のような経緯であったが、それにしても米国企業というもののきびしさを垣間見たような感じであった。ライバル関係の Holt 社の Rep. であった Lambert 氏を引き抜き、いきなり多くのベテラン社員の居る自社の東京支局長に据え、この人事は失敗だったと見極めるや否や半年で即日退職の電報を打つなど、日本人の目から見ると何と無駄なことをしているのだろうかと思えることを、平然と試みている。若い国のバイタリティーであろうか。

(2) ノベルティー ブック サービス 創立

大阪の海外書籍貿易商会の野崎氏が独立し、頭記の会社を設立、多分布地見本などを取り扱うであろうとのこと。昭和41 (1966) 年 8 月 4 日の理事会で報告があった。

(3) 交通事故

6 月 27 日の理事会では、国際書房社長の服部正喬氏から、同書房の専務貞夫氏が、5 月 25 日に交通事故に遭い 10 日間入院、全快して退院した旨の報告があった。轢いたのはモーターバイクであったが、乗っていた会社員の

勤務する会社々長、専務も見舞いに來たし、本人は毎日見舞いに來て充分の誠意を見せてくれた由。不幸中の幸いであった。

なお服部社長からは、貞夫専務の全快を機に、洋書輸入協会の諸会合には、出来るだけ貞夫専務に出席して貰うつもりの方針の発表があった。

(4) 米国 Van Nost. 社の Mr. Crane 来日

D. Van Nostrand Company, Inc. の President, Mr. Edward Matthews Crane, Jr. が来日、昭和41 (1966) 年 10 月 14 日の理事会に出席、更にプレスクラブで招宴が開催された。

(5) ワールド ブック コーポレーション (サービス?) 設立

同年 10 月に朝日ブックストア社が洋書を廃業し、洋書輸入協会から脱退したが、これを引継ぐという形で中條氏が頭記の社を設立した。中條氏は元海外出版貿易の社員、ついで朝日ブックストアに移り、更に馬場氏の所に居た人の由、9 月 16 日及び 10 月 14 日の理事会で報告があった。

(6) 福本書院、創立 40 年

昭和41 (1966) 年 11 月 2 日の理事会に、福本書院の創業者の福本初太郎氏 (故人) が出席、創立 40 周年の記念の挨拶があり、記念品が配布された。昭和41年現在で創立 40 周年であるから、大正 15 年の創業。福本氏は丸善の出身で、ドイツ哲学・文学・神学を愛好し、それを専門として 40 年間ひと筋でやって來られた温厚篤実な人格者。しかも明治の人らしく一本筋が通っておられた。

昭和 16 (1941) 年 3 月、海外出版物輸入同業会が成立し、福本書院はその最初のメンバーの一員。同業会は一時期休止の後、戦後の昭和 21 (1946) 年 8 月に再建されたが、福本氏はその時以来病氣療養中のために遽に漏れた昭和 40 (1965) 年 5 月まで、20 年間理事を継続された。そしてその後は直ちに名誉理事に推荐されている。

故福本初太郎氏は、創立 40 年の翌年の昭和 42 (1967) 年に喜寿を迎えておられる。この原稿を書いている平成 8 年 (1996) 年は、福本書院の現社長長和子氏 (初太郎氏長女) が、数えの喜寿を迎えられるはずである。大正 9 年生まれで小生と同年であるから、互いに当時から 30 年

の年月を経ている。月日の経つのは早いものという感慨がある。

(7) 梅田書房社長逝去

昭和41（1966）年12月28日、関西支部の梅田書房の社長山内金三郎氏が逝去された由、昭和42年1月10日の理事会で報告された。一同で哀悼の意を表する。なお同氏は、いつも協会の会合に出席される山内氏の父上とのこと。

(8) 三洋出版貿易創立10周年

昭和42（1967）年1月10日の理事会で、三洋社長の鈴木常夫氏から、創業20年、創立10年の記念に同社紹介のパンフレットを作ったということで、一同に配布された。それによれば、昭和21（1946）年神陵文庫を創業、昭和31（1956）年三洋出版貿易を創立、昭和35（1960）年本社を京都から東京へ移転、現在の従業員数43名、資本金400万円、月商3,000万円。また「創立者の略歴によれば、鈴木常夫氏（故人）は、大正12年生、神戸一中から旧制三高へ進み、京大法学部に入り、学徒動員後復学、学生の勉強に書物が不足しているのを憂えて書物集めに奔走、自宅に神陵文庫を創業。やがてリーダーズ・ダイジェストの縁で、この販売元であった北尾新聞舗、店主北尾清氏を知り、同氏の要請で全国にリーダーズ・ダイジェスト販売局を設置、販売業務に従事する。昭和28年株式会社北尾書店が創立されると共に初代洋書部長に就任、同31年退職して三洋出版貿易を設立したもの。

同氏は洋書輸入協会理事、三高同窓会幹事、日本寮歌振興会実行委員などを兼ねた豪放さと共に面倒見の良さで知られていたが、惜しくも若くして逝去された。

(9) Pergamon Press 社長 R. Maxwell 氏来日

英国 Pergamon Press 社長 Mr. Robert Maxwell（故人）が来日したので、洋書輸入協会として昭和42（1967）年1月17日に、丸善地下ピーコックで懇談会を開催した。

(10) 第一回暮会開催

昭和42（1967）年2月8日の理事会で、出来たばかりの文化厚生委員会（委員長、洋販渡辺氏）より第一回暮会を開催した旨の報告があった。参加者は22名、於海外出版貿易の地下食堂。盛会だった由。

(11) 三洋社員交通事故の件

またまた三洋出版貿易の話題であるが、3月2日の理事会での報告によれば、同社々員2名が、午前2時まで外で飲み、会社に戻って車を持ち出し、安全地帯にぶっ

つけて重傷を負った由。

三洋社長の鈴木氏の話にれば、同氏は洋販渡辺氏のすすめで、自動車保険を AIU に変えていた所今回の事件があり、泥酔運転でも保険をキャッシュで払ってくれる唯一の保険会社であったので、大変助かったとのこと。

126.8 田辺 寛氏退職

昭和42（1967）年3月16日の理事会で、丸善の洋書の仕入課長であり、昭和21（1946）年8月の協会再建時からこれの事務局の担当者として、昭和42年の3月まで、延々と洋書輸入協会の裏方を勤められた田辺寛氏（故人）の退職が発表された。

戦後の洋書輸入協会は、事務局とは名ばかりで、実際には丸善の丸抱えであり、田辺氏は丸善の洋書の仕入課長を本務としながら、片手間に協会事務を兼務されていた。時は戦後で、ドル不足を始めとして現在からは想像も出来ない程統制色が強く、万事に官庁との折衝を必要とする案件が多かった。田辺氏は、洋書輸入協会の理事会と官庁との間の接点に立ち、陳情日時、懇談日時の御膳立ては勿論のこと、陳情や懇談にすべて同席して、その趣旨を先ず説明し、途中の折衝や議論は理事がやるにしても、最後には必ずその日の結論を述べて出席者の諒承を得ていた。

勿論それだけではなく、協会の理事会の懇談会、総会の招集、議題の準備、議事の進行、議事録の作成、必要な場合の JBIA 発の起稿など、万事を事務局として滑らかに運んでいた。なお表には出て来ないが、田辺氏の背後には丸善の田辺氏周辺の人達の大きなバック・アップがあったと思われる。

田辺氏で一番感心した所は、官庁のお偉方だろうが同業の猛者であろうが、全く物怖じしないことであった。それも平気で言いたいことを言い、そして角がたたない。官庁への陳情も、官庁の各方面から来る協会へのクレームも、同業から協会への沢山のクレームも、ああニコニコしながら対応されると勢いを失ってしまうという感じであった。

田辺氏は62歳、既に定年が延長されており、会社からの再度の延長の要請も同氏自身の都合で辞退された模様。このように同氏は、協会創立以来の功労者ということで3月20日には理事会で送別会、4月14日の懇談会で感謝状が贈呈され、洋書輸入協会顧問に推挙されている。なお感謝状の内容は、洋書輸入協会々報第1号に掲載されている。（続く）

シーボルト将来本〔4〕

丸善・本の図書館 鈴木 陽 二

◆シーボルト第1回来日と搬入書籍(4)

前回概観したように、シーボルトは来日に当たってこの時代の第1級の博物学文献を丹念に選定していることに驚嘆するが、このリストは、シーボルトの学問的姿勢や日本調査にかけた強い姿勢を、まざまざと私たちにを見せてくれる。

ところで、シーボルトが日本から追放されたあとこれらの書籍がどうなったのか、その行方についても論議がある。シーボルトは蘭印政庁にこの書籍を売却するため1826年にリストを作成しているが、その時点ですでに欠本が見られ、またシーボルトの後任者の薬剤師が1834年に目録を作成した際、10点ほど行方不明になっていた。シーボルトが愛弟子や資料収集の見返りとして協力者に贈与した本は、当然ながら日本国内に残留したことになる。オランダは1842年に日本の博物学的調査を打ち切ったのでその後ジャワに持ち帰ったという説もあるが、しかし、そのころ駐日していた植物と化学が専門の商館員がこのコレクションを利用したという記録がないことや、またオランダ商館日誌にも記述がないことから考えて、それ以前にジャワに引き上げられた可能性が強いのではないかと見られている(竹内精一「前出論文」)。

◆シーボルト第2回来日と搬入書籍(1)

ペリーの来航を機に各国の日本に対する開国圧力が強まり、アメリカ・イギリス・ロシア・フランスなどと、次々に修好・通商条約を締結することになった。オランダとの間では1856(安政2)年に日蘭修好条約が、さらに1858(安政5)年に通商条約が成立した。そして、シーボルトは国禁が解かれ、1859(安政6)年に長い間待ち焦がれていた日本の地を再び踏むことになった。資格はオランダ貿易会社の代理人ということで、長男アレキサンダーを伴っての来日であった。

激変する国際関係の中で、幕府は対外交渉や新しい国家体制を築くために外国人の知識・技能を求めることになった。いわゆるお雇い外国人の採用を進めた。シーボルトが長崎に居住してから1年半ほどして幕府より学術講演の依頼が舞い込んだが、彼はそれを機会に貿易会社

を辞めて長崎を引き払い、幕府の宿舎赤羽根接遇所(現在の東麻布)に移り住むことになった。それから2週間ほどして、近くの高輪東禅寺のイギリス公使館が水戸浪士に襲撃されるという事件が発生し、彼も負傷者の治療や幕府と公使館の交渉の仲介に尽力した。この赤羽根接遇所で彼は幕府の顧問という資格で、学術講演を行う一方、1862(文久1)年に行われた開港延期交渉の遣欧使節に関するアドバイスを始め、いろいろな国内行政の問題やら対外関係についての意見を幕府に具申した。

しかし、彼の意見は必ずしもオランダ政府や列強諸国の対日政策と一致するものではなく、むしろ、その助言は逆にオランダを危機に落とす可能性も孕んでいた。そこで、オランダ総領事のドゥ・ヴィットは幕府に圧力をかけてシーボルトの解任を迫り、幕府も迷ったあげく彼に江戸退去を求めることになった。こうしてシーボルトは、あれほど切望して再来した日本であったのに、結局わずか3年ほどで滞在を打ち切り、1862(文久2)年に再び傷心を抱きながら長崎を去ることになった。

さて、シーボルト再渡来の経過説明から本題に戻り、彼がこの第2回来日のとき持ち込んだ書籍について筆を進めることにしたい。

シーボルトは1861年に、蘭印政庁の指示で出島に印刷所を開設した。そして、ここで再渡来の折り搬入した書籍の目録を印刷した。“Catalogue de la Bibliotheque, Apportée au Japon par Mr. PH. F. DE SIEBOLD”という表題で、1862年に“DEZIMA”で印刷されたことが表示されている。この目録の書誌学的なデータ・内容・制作の経過・意味などについての詳細は、すでに幾つかの論文で考証されている。例えば、東海大学の向井晃教授による「舶載洋書目録の考察—シーボルト再渡来時の将来蔵書目録—」や山岸光宣「シーボルト献納本」などのすぐれた研究を見ることができ、それ以上の解説は望めないだろう。しかし、この将来本はシーボルトが帰国したあとも日本に残存して日本近代化の過程で実際に活用され、欧米文化摂取の一端を担った文献ということができるので、洋書輸入史の一断面としてここでひとわり説明しておくことにしたい。

ケンブリッジ・インターナショナル英英辞典 Cambridge International Dictionary of English

Ed. by Paul Procter

〈好評発売中〉 1995. 1,792pp. 23.4×15.6cm (「使用の手引き」付)
(ISBN:0-521-48421-9/注文番号MBN:9439158) ペーパー版 ¥2,816
(ISBN:0-521-48236-4/注文番号MBN:9439157) ハード版 ¥4,078
(ISBN:0-521-48469-3/注文番号MBN:9439159) フレキシブル版 ¥3,496
(いずれも税別)

英語教育界における豊富な実績を誇るケンブリッジ大学出版局が初めて刊行する、従来の伝統的辞書編集の殻を打ち破り、英語が国際通用語としての重要性を増す21世紀を先取りした、画期的な英語学習辞典!

即座に、明確(clear)な意味把握が可能。

従来の、見出し語のもつ複数の意味を番号別に整理・区分する方式にかわり、1語1義主義を徹底。それぞれの意味をガイドワード(「GUIDE WORD」)として明示。
基本的な約2,000語(defining vocabulary)による語義説明を徹底したことと合わせ、調べたい言葉の正確な意味把握が即座にできるようになりました。

総合的(comprehensive)な内容。

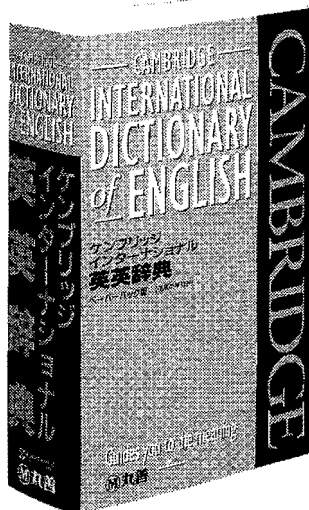
1億語以上のコーパスを駆使し、見出し語100,000語(うち主要語50,000語)、例文100,000文、専門語句400語など、類書を質・量ともに凌駕するレベルを誇ります。

国際的(international)な視野。

米・英・豪など、異なる英語圏での意味・用法・発音の違いはもちろん、本書は16か国の異言語について、まぎらわしく誤りやすい語を“False Friend”として掲載。国際的広がりをもつ英語の実体を反映させています。

個人学習、教室における 使いやすさ(user-friendly)の追求。

計26,000件の「語句・イディオム索引」(Phrase Index)、教室での指導に役立つ本文の「行数表示」、文法上・語法上の微妙な差異を例示する豊富かつ最新の用例。



(Cambridge University Press, GBR/販売代理店: 丸善)



【本社・日本橋店】〒103 東京都中央区日本橋 2-3-10 ☎(03) 3272-7211 振替: 00170-5-5

支店・営業所—東京(お茶の水・丸の内・内幸町・浜松町・アークヒルズ・渋谷・府中・錦糸町・北千住・柏・取手・土浦・船橋)・千葉・八王子・大宮・新潟/札幌・仙台・盛岡・筑波・水戸・横浜・静岡・浜松・名古屋・津・岐阜・金沢・京都・大阪・神戸・姫路・岡山・松山・広島・福岡・長崎・鹿児島・沖縄/
ニュージャージー・ロンドン・シンガポール

1996年8月 通巻第351号 洋書輸入協会 編集者 神田 俊二
〒103 東京都中央区日本橋1-21-4 千代田会館5階20号室 ☎(03) 3271-6901 FAX. (03) 3271-6920

印刷所—藤本綜合印刷株式会社